

来訪者をめぐる説話

——日韓比較の視点から——

川 森 博 司

-
- | | |
|---------------|------------------|
| 1. 韓国の「長者池伝説」 | 4. 来訪者の性格 |
| 2. 「大歳の客」型の昔話 | 5. 来訪者説話の変異とその背景 |
| 3. 登場人物の対立関係 | おわりに |
-

論文要旨

来訪者を歓待したり冷遇したりすることによって、幸運を得たり不幸を招いたりするという形の説話は、世界各地で広く語られているが、本稿は其中で、日本と韓国の事例について比較研究をおこなうことを目的とする。韓国では、やってきた僧を虐待したために長者の家が陥没して池になった、という内容を骨子とする「長者池伝説」が幅広く伝承されており、日本では、「大歳の客」とよばれる類型の昔話が多い。このタイプの説話の基本的な登場人物は、〈来訪者〉、〈来訪者を歓待する者〉、〈来訪者を冷遇する者〉の三者である。まず、来訪者を歓待する者と冷遇する者としてどのような人間関係が設定されているか、を検討すると、韓国の「長者池伝説」では〈舅：嫁〉の対立関係が圧倒的に多く、日本の「大歳の客」型の昔話では〈隣同士〉の対立関係が多い。このことは、それぞれの文化における人間関係への関心のあり方が反映されているものと考えられる。次に、来訪者のヴァリエーションを見ると、韓国では仏教の僧を中心とするが、それに道士というイメージが重なっていることも多い。日本では旅の宗教者や盲目の宗教者が多く登場している。これは、それぞれの宗教的背景や説話の管理者の違いを反映したものである。第三に、「長者池伝説」で来訪者が冷遇された後の過程の変異型を見ると、来訪者が「風水」の知識にもとづいて長者を滅ぼすという形で語られるものが多い。このように来訪者をめぐる説話に風水の思想が結びついた形は日本では見られず、韓国の場合のひとつの大きな特徴と考えられる。説話のように国際的に共通した類型が多い分野では、日本国内の伝承の意味づけをおこなう上でも、国外の類似した伝承と比較して、類似点と差異点を検討することが必要とされるのである。

1. 韓国の「長者池伝説」

韓国各地で幅広く伝承されている伝説に「長者池伝説」とよばれるものがある。例をあげてみよう。

〔事例1〕 ある長者の家の話だ。主人が牛馬小屋で仕事をしているとき、僧が托鉢にやってきた。主人は「おまえにやるものはないよ」といって、何もやらなかった。僧がそれでもしつこくせがむので、主人は「これでも持って行け」と鍬で牛の糞を差し出した。僧は、それを受け取って、怒りもせずにそのまま帰ろうとした。それを見て、その家の嫁がそっと米を持ってきて僧に渡した。すると、僧はその嫁に「この家にいると死んでしまうから、私について来なさい。そのとき絶対後ろを振り向いてはいけませんよ」といった。嫁は赤ん坊をつれて家を出て、僧について行った。その途中、後ろで大きな雷の音がしたので、嫁は思わず後ろを振り返った。長者の家は陥没して大きな池になっており、嫁はその場で石仏になってしまった。こうしてできた池が今の黄池である。

—江原道寧越郡—(『韓国口碑文学大系』2-8:555)

崔來沃は、『韓国口碑伝説の研究』(1981)という書物において、この「長者池伝説」を、類話数の多さと分布範囲の広さの点で、韓国を代表する五つの伝説のうちの一つに位置づけ、韓国各地で採集された201の類話を資料に分析をおこなっている。崔來沃の分析を参考に、長者池伝説の展開を記述すれば、次のようになる(崔來沃1981:28参照)。

- I. 長者が僧に牛の糞を与える。
- II. 嫁が僧に米を与える。
- III. 僧が嫁に「絶対に後ろを振り向いてはいけない」という。
- IV. 長者の家が罰を受けて、雷と雨によって陥没し、池になる。
- V. 嫁が禁忌を破って後ろを振り向いたため、石になる。

この伝説には、来訪者、来訪者を冷遇する者、来訪者を歓待する者の三者が登場し、来訪者を冷遇した者が罰を受ける。ただし、来訪者を歓待した者が何らかの報酬を受ける、というモチーフはなく、来訪者を歓待した者も禁忌を破ったため罰を受ける、という展開になっている。この点は、たとえば、日本の「蘇民将来」の伝承と異なるところである。

〔事例2〕 備後の国の風土記にいう、——疫隅の国社。昔、北の海においてになった武塔の神が、南の海の神の女子をとほひ与波比(求婚)に出でいかれたところが、日が暮れた。その所に将来兄弟の二人が住んでいた。兄の蘇民将来はひどく貧しく、弟の将来は富み、家と倉が一百あった。ここに武塔の神は宿を借りたが、惜しんで貸さなかった。兄の蘇民将来はお貸し申しあげた。そして粟柄(粟の茎)をもって御座所を造り、粟飯などをもって饗応した。

さて終わってお出ましになり、数年たって八柱の子供をつれて還って来て仰せられて、「私は将来にお返ししよう。お前の子孫はこの家に在宅しているか」と問うた。蘇民将来は答えて申しあげた。「私の娘とこの妻がおります」と。そこで仰せられるには、「茅の輪を腰の上に着けさせよ」と。そこで仰せのままに〔腰に茅の輪を〕着けさせた。その夜、蘇民の女の子一人をのこして、全部ことごとく殺しほろぼしてしまった。そこで仰せられて、「私は速須佐雄の神である。後の世に疫病がはやったら、蘇民将来の子孫だといって、茅の輪を腰に着けた人は免れるであろう」といった。

〔「備後国風土記」逸文、『釈日本紀』巻七、吉野訳1969：325〕

来訪者を冷遇する者と来訪者を歓待する者という登場人物の組み合わせは、「長者池伝説」と共通であるが、来訪者を歓待した蘇民将来の一族は殺戮を免れている点が「長者池伝説」と異なる。では次に、現行の日本の昔話の中でこれらと対応するものを見ていくことにしよう。

2. 「大歳ノ客」型の昔話

現行の日本の昔話で、「長者池伝説」や「蘇民将来」と類似した構成をもつのが、『日本昔話大成』で「大歳ノ客」の項目にまとめられている「猿長者」、「宝手拭」、「大歳ノ客」などの昔話であり、また『日本昔話通観』で「超自然と人」の中の「来訪神」の項目にまとめられている「大みそかの客一授福型」⁽¹⁾、「大みそかの客一猿長者型」、「宝手拭」などの昔話である。まず、「宝手拭」の例をあげてみよう。

〔事例3〕昔々、ある日のこと、一人のみずぼらしいハッチ（物乞い）が来た。ちょうどその家の主婦は、機をおっていたが、やかましがって、何もやらずに追いとばした。その女中がそれを気の毒に思って、主婦には内緒で、ホッケを一つ持って行った。ハッチはたいそうありがたがって、お礼に手拭を一筋くれた。翌朝女中がその手拭で顔をふくと、きたない物を拭って取るように、顔がきれいになった。皆もびっくりして、その美しさを褒めるのであった。女中もはじめは皆のひやかしだと思っていたが、鏡を見るとまったく自分でも驚くほどであった。女中は昨日のことを詳しく話して、その手拭のただの品でないことを語り合ふた。主婦はこの話を聞いて、「昨日のホーンヤさんなりやア、私があぐるとじゃったもねエ」といって口惜しがった。そして今度見当たったら、自分に教えるようにと、女中にいいつけた。その後幾日かして、また前のハッチが通りかかった。女中はそれを内に呼び入れて、主婦に告げた。主婦は今度こそは自分が何か良い物をもらおうと思って、たいそう丁寧にもてなして、いろいろのものをたくさんやった。物乞いは繻子の帯を一本お礼にやって立ち去った。主婦は何か良い帯であろうと思って、さっそく締めると、その帯はいつのまにかクロタ（黒い蛇）に変わっていた。

—長崎県壱岐郡— (柳田編, 山口採録1973: 46)

「宝手拭」は一般に、来訪者を歓待した者が手拭をもらい、それで顔をふくと美しくなり、来訪者を冷遇した者が同じ手拭で顔をふくと醜い顔になる、という構成をとっていることが多い。では次に、「猿長者」の例をあげてみよう。

〔事例4〕 大みそかの夜、子どもがたくさんいる金持ちの家に汚れた年寄りが来て宿を頼むが、金持ちは塩をまいて追い返す。年寄りが隣の貧乏な家に行き頼むと、「私の家には何もないので、隣の金持ちの家に行け」というが、年寄りがことわられたことを話すと、泊めてくれる。年寄りは老夫婦に水を入れた鍋を火にかけさせてごちそうを出し、その望みを聞く。二人が「若返りたい」というと、翌朝起きたとき二人は三十、四十くらいに若返っている。隣の金持ちがわけを聞き、家族をつれて年寄りを追いかけると、子どもたちは鳥、鳥、けだものになる。金持ち夫婦は「若返らせてやるから」といわれ、焼いた石に座ると、ミールザルになり、尻が赤くなった。それから正月には「若くなっておめでとう」という。

—沖縄県石垣市— (『通観』26: 48)

来訪者を歓待した者は、来訪者の呪力によって若返り、冷遇した者は、猿をはじめとする動物にされてしまう。筋の展開を抽象化すれば、「宝手拭」と同様の構成になっていると考えてよいであろう。次に「大歳(2)の客」の例を見よう。

〔事例5〕 大歳の晩に警女が金持ちの爺婆の家を訪れ、「泊めてくれ」と頼むが婆にことわられる。警女が隣の貧乏な爺と婆の家に行き頼むと、「食べ物がなくてもよければ」と泊めてくれる。警女が足を洗いに行ったまま帰らないので、井戸のそばに行ってみると、警女のわらじがあり、つるべを上げると小判が入っている。爺と婆が喜んでいて隣の婆が聞きつけ、翌年の大歳にどこからか警女をつれてきて井戸に突き落とす。婆が爺を呼んできてつるべを上げると、警女が上がってきて目を開けてにらみ、それからその家は悪いことばかりつづいた。

—新潟県北蒲原郡— (『通観』10: 239)

「猿長者」や「大歳の客」の場合、来訪者を冷遇するモチーフが冒頭にはなく、一方が来訪者を歓待して幸運を得たのを見て、他方がこれをまねるという展開になるものもある。

〔事例6〕 座頭が「泊めてくれ」というので、ふとんがないため炉に火を焚いてあたらせておくと、座頭は居眠りをし、火の中にくろげこんで死ぬ。ござに包んでおくと、翌朝は銭になっている。升ではかっていると、隣の人が見てうらやみ、通りかかった座頭をむりにつれこんで火にあたらせ、火の中へ突きころばしてござをかけておく。翌朝見るとうじがぐよくよしていた。

—青森県八戸地方— (『通観』2: 223)

さて、事例1「長者池伝説」、事例3「宝手拭」、事例4「猿長者」、事例5「大歳の客」のそれぞれの構成を対応させてみると、表1のようになる。

表1 「長者池伝説」と「大歳客」型昔話の対応関係

	長者池伝説	宝手拭	猿・長者	大歳客
1	長者が僧に牛の糞を与える	主婦が物乞いを追い払う	金持ちが汚れた年寄りを塩をまいて追い返す	金持ちの婆が瞽女に宿をことわる
2	嫁が僧に米を与える	女中が物乞いにホッケを与える	隣の貧乏な老夫婦が汚れた年寄りを泊める	隣の貧乏な爺と婆が瞽女を泊める
3	僧が嫁に「絶対に後ろを振り向いてはいけない」という			
4		女中が物乞いに手拭をもらい、それで顔をふくときれいになる	年寄りが貧乏な老夫婦を若返らせる	瞽女が井戸の中に消え、つるべを上げると小判がはいっている
5	長者の家が罰を受けて、雷と雨によって陥没し、池になる	主婦が物乞いにもらった帯が黒蛇になる	隣の金持ちが猿にされる	金持ちが瞽女を井戸につき落とし引き上げると瞽女がにらみ、それからその家は悪いことが続く
6	嫁が禁忌を破って後ろを振り向いたために、石になる			

「長者池伝説」には「後ろを振り向いてはいけない」という禁忌が導入されているため、来訪者に親切にした嫁も報われず、禁忌を破ったため石になるという展開をとり、他の三つの事例との間にずれが生じている。四つの事例に共通しているのは、最初の1, 2の部分である。この部分をより抽象化すれば、1. 〈来訪者を冷遇する〉, 2. 〈来訪者を歓待する〉というように記述することができる。そこで、まずこの部分にしぼって、韓国の伝承と日本の伝承を比較してみることにしよう。

3. 登場人物の対立関係

韓国の「長者池伝説」においても、日本の「大歳客」の系統の昔話においても、物語において必要不可欠の役割を果たす登場人物は、〈来訪者〉, 〈来訪者を冷遇する者〉, 〈来訪者を歓待する者〉の三者である。各説話の類話を見ていくと、この三つの項目に当てはまる登場人物には、さまざまなヴァリエーションがある。その中でまず、〈来訪者を冷遇する者〉と〈来訪者を歓待する者〉の関係に注目して考察することにしよう。

崔來沃(1981)は、韓国各地で採集された「長者池伝説」の201の類話を資料に登場人物の対立関係を分析している。その結果は表2のようである。

「長者池伝説」の場合、舅と嫁の対立関係になるものが圧倒的に多く、全体の91.5%を占め

表2 「長者池伝説」の登場人物の対立関係

〈来訪者を冷遇する者〉 : 〈来訪者を歓待する者〉	類 話 数
舅 : 嫁	184
舅と姑 : 嫁	1
姑 : 嫁	3
父 : 娘	4
母 : 娘	2
夫 : 妻	2
主人 : 女中と作男	2
兄 : 弟	1
村人 : あずき粥売りの婆さん	1
金持ちの男 : 隣の娘	1
計	201

(崔来沃1981: 140より)

表3 「宝手拭」の登場人物の対立関係

〈来訪者を冷遇する者〉 : 〈来訪者を歓待する者〉	類 話 数
(女)主人 : 女中・下女	22 (57.9%)
隣同士	7 (18.4%)
姑 : 嫁	5 (13.2%)
継母 : 継子	2
母 : 娘	1
村の女同士	1
計	38

が多く、全体の57.9%を占めている。その他、隣同士の対立関係も全体の18.4%になる。これも、「長者池伝説」においては、1例のみであったことを考えるとかなり特徴的である。姑と嫁の対立関係は5例で、13.2%である。

次に、事例4、5にあげた「猿長者」と「大歳客」の場合を考えてみよう。この二つの話型は大きく見ると同じ系統に属している。『大成』では、「大歳客」という項目の中の小項目として「197 猿長者」、「199A 大歳客」、「199B 大歳客」が設定されており、『通観』では、「来訪神」の項目の中の小項目として「14A 大みそかの客一授福型」、「14B 大みそかの客一猿長者型」が設定されている。このうち「猿長者」は、その類話の分布地域が相当のかたよりを見せている。『日本昔話事典』の「猿長者」の項には次のように記述されている。

『日本昔話集成』には15例の報告があり、それ以後の採集で80例ほどの採集報告があるが、

ている。これに舅・姑と嫁、姑と嫁の対立を加えると、全体の93.5%になる。では、日本の場合はどうだろうか。まず、事例3にあげた「宝手拭」の場合を検討してみることしよう。

「宝手拭」の類話は、『日本昔話通観』全29巻の中に39話収録されている。このうち1話は人物の対立関係が明らかでないので、残りの38話について分析すると、表3のようになる。

「長者池伝説」の分析対象資料が201話であるのに対して、「宝手拭」の場合は38話で、比較をおこなうにはかなりの量的な不均衡があるが、大まかな傾向を見てみよう。「宝手拭」の類話では、女主人と女中・下女の対立関係になること

全体のうちで、82例までは奄美諸島と沖縄県からの報告であり、6例は東北地方と新潟県からの報告であり、南北の両端に主として伝承されている話といえる。特にモチーフの完備した伝承は南島にのみ語られているが、沖縄県には現在、猿は棲息していない。(三原1977:391)

『通観』全29巻には「大みそかの客一猿長者型」に分類される資料が全部で71話収録されており、そのうち57話が奄美諸島および沖縄県からの資料である。したがって、この話型の分析においては、分布がかなり奄美・沖縄地域に集中しているという地域性を考慮に入れておかねばならない。「猿長者」の類話における登場人物の対立関係を日本本土、奄美諸島、沖縄県の三地域に分けて分析すると表4のようになる(対立関係を設定していないものは除く)。

表4 「猿長者」の登場人物の対立関係

〈来訪者を冷遇する者〉：〈来訪者を歓待する者〉	本 土	奄美諸島	沖 縄 県	類話数合計
隣同士	2	3	22*	27 (42.1%)
東 : 西	2	4	6*	12 (18.8%)
庄屋 : 村人	2	0	0	2
長者 : 下女	1	0	0	1
その他	3	1	19	23
計	10	8	46	64

* 東隣：西隣という対立が一つあり、〈隣同士〉，〈東：西〉の両方に重複してカウントされている。

次の「大歳の客」は、来訪者を歓待する者と来訪者を冷遇するものの対立関係が設定される場合と、単に来訪者を歓待した者が幸運を得る過程が語られるものの二通りがある。『大成』の199Aは対立関係が設定されているもので、199Bは対立関係のない単純成功型である。『通観』の「14A 大みそかの客一授福型」には両方のタイプが含まれている。ここでは、本稿の主題にしたがって、対立関係が設定されている方の類型を検討することにする。「猿長者」の場合と同様の分析をおこなうと、結果は表5のようになる。

また、表2～5の分析を総合して、それぞれの登場人物の対立関係を〈舅・姑：嫁〉，〈主人：

表5 「大歳の客」の登場人物の対立関係

〈来訪者を冷遇する者〉：〈来訪者を歓待する者〉	本 土	奄美諸島	沖 縄 県	類話数合計
隣同士	48	5	5	58 (69.0%)
東 : 西	1	0	1	2
兄 : 弟	2	1	0	3
庄屋のかみさん : 下女	1	0	0	1
その他	19	1	0	20
計	71	7	6	84

表6 登場人物の対立関係の比較

人物の対立関係	長者池伝説	宝手拭	猿長者	大歳の客
舅・姑：嫁	93.5%	13.2%	0%	0%
主人：使用人	1.0%	57.9%	0.2%	0.1%
隣同士	0.5%	18.4%	42.1%	69.0%
その他	5.5%	10.5%	57.7%	30.9%

使用人)、〈隣同士〉、〈その他〉の四つに分類して、比較すると表6のようになる。

このようにして比べてみると、韓国の「長者池伝説」において〈舅・姑：嫁〉の対立関係の比率がきわめて高く、日本の事例においては、〈隣同士〉の対立関係の比率がかなり高い⁽³⁾。「宝手拭」においては、この話型に特有の「手拭で顔をふくことによって一方は美人になり、一方は醜くなる」というモチーフにひきずられたためか、女主人と女中・下女の対立関係が目立っている。

このような各話型における登場人物の対立関係の設定の違いは、どこから生み出されるのであろうか。ひとつ考えられることは、これらの説話を伝承している社会における特定の人間関係への関心の強さが、説話における人物設定に反映される、ということである。本稿の例でいえば、韓国においては〈舅・姑：嫁〉の人間関係に対する関心が強く、日本においては〈隣同士〉の人間関係に対する関心が強いということが想定される。

ここでは、とりあえず、来訪者の歓待と冷遇をめぐる説話を題材に検討してみたが、より多くの日本の昔話や伝説の話型について検討を進め、また国外の資料との比較をおこなうことによって、日本の文化における人間関係への関心のあり方の傾向が明らかにされてくるものと考えられる。

さて、これまでは、来訪者をむかえる側の人間関係について見てきたが、次に来訪者自身について検討してみよう。

4. 来訪者の性格

「長者池伝説」の来訪者は一般に僧と記述されていることが多いが、崔來沃の分析によれば、表7のようなヴァリエーションがある(崔來沃1981:141)。

つまり、〈仏教性〉、〈神通力〉、〈求乞〉の三つの要素を核にし、またそれぞれの要素を組み合わせることによって、来訪者のさまざまなヴァリエーションが生じている。たとえば、〈仏教性+神通力〉の項目に見られるように、僧と道士は同一の説話の中でも混同して語られることがあり、〈仏教性+求乞〉の項目のように、僧と乞食のイメージが重なり合って意識されていることもある。

表7 「長者池伝説」の来訪者

仏教性	神通力	仏教性+神通力	求乞	仏教性+求乞
僧 師僧 菩薩 老僧 大師 閻羅国から 来た使者 仏様の使者	道士 山神霊 白髪老人 龍神	道僧 僧の服を着た道士 道士僧 聖人様 僧=道士 道士=僧	乞食 乞人 過客, 行客 貧しい者 貧老人 物乞い	乞僧 腹をすかした僧 泊まろうとして来た僧

(崔來沃1981: 141より)

このようなさまざまな形であらわれる来訪者を冷遇したために、長者の家は陥没し、池になってしまう。多くの類話がこのような展開をとっているということは、この説話を伝承した韓国の社会において、表7のような来訪者に人知を超えた神秘的な力を認めていたことをあらわしている。その力は、天地自然の現象を自由にあやつることができるようなものと見なされていたようである。

では、日本の「大歳客」型の昔話の場合にはどのような来訪者が登場するのであろうか。長者池伝説の場合にならってリストアップしてみると表8のようになる。

表8 「大歳客」型昔話の来訪者

仏教性	遍歴	盲目	求乞	年長	複合型
和尚 坊様 弘法大師	遍路 六部 巡礼 巡礼女	座頭 盲人 瞽女 按摩 検校	乞食 物乞い	汚い爺 白髪の爺	旅僧 乞食坊主 物乞いの僧 旅の坊さん 乞食爺

日本の場合、ひとつは遍路、六部、巡礼など旅の宗教者というイメージが強く、また、座頭、瞽女などの盲目の宗教者という要素も広くあらわれる。韓国における神通力をもった道士というタイプは見るできない。この点は、韓国と日本の宗教的基盤の違いを反映したものと考えられる。日本の伝承における来訪者として、旅の宗教者や盲目の宗教者の存在が際立っているのは、「大歳客」型の昔話の伝承に彼ら自身が強く関わっていたことによるものようである。横山登美子は「死骸黄金譚の展開」と題する論文で次のように述べている。

「大歳客」の訪問者が座頭や六部であったのも神来臨の思想を基とした常民の観念に支えられて、いわば神の資格で訪れた座頭や六部が反映したもので、なぜ彼らの現実がすぐ昔話に投影したかといえ、大歳の夜に訪れる彼ら自身が、この「大歳客」の管理者であり、語り手であったからかと思われる。(横山1984 [1958]: 170)

このような解釈が妥当かどうか、ここでは検討する準備がないが、少なくとも日本の「大歳の客」型の昔話の伝承に、特定の宗教者が強く関わっているのは確かなようである。

では次に、ここで見たような来訪者のイメージをさらによく理解するために、韓国と日本のそれぞれの伝承において、来訪者を歓待したり冷遇したりした後の筋の展開の仕方に目を向けてみよう。

5. 来訪者説話の変異とその背景

事例1にあげた長者池伝説は標準的なものであり、この形をとるものがかなり多いが、若干のヴァリエーションがある。一つの変化型として、「嫁が脱出して生き残る」という形をとるものがある。この場合、「後ろを振り向いてはいけない」という禁忌モチーフがなく、したがって「嫁が石になる」というモチーフもない。崔來沃(1981:131)によれば、長者池伝説の201の類話中10話がこの形であるという。事例1の形の長者池伝説から「禁忌モチーフ」と「化石モチーフ」をとりのぞくと、残りの部分は、

- I. ある者が来訪者を冷遇する
- II. 来訪者を冷遇した者が何らかの被害を受ける

という形に記述することができる。長者池伝説の筋の展開の基本的な部分をこのように抽象化してとらえ、同様の展開をもつ説話を、長者池伝説の変異型として考察してみることにしよう。

崔仁鶴の『朝鮮伝説集』(1977)の「風水信仰の部」にまとめられている一連の説話の中には、長者池伝説の変異型としてとらえられるものがいくつかある。例をあげてみよう。

〔事例6〕京畿道開豊郡光徳面と大聖面の境に一つの川が流れている。これが黄江である。高麗時代、大聖面三達里の裏山の下に、長者が、鯨の背中ほどの大きな瓦葺きの家に住んでいた。ある日、一人の僧がこの家にやってきて、「物乞いに来ました。仏様に布施を施して下さい」というと、家主は怒って牛馬小屋で仕事をしていた下男に牛の糞をひとシャベルやるようにいつけた。僧は家主の無礼な行動に呆れて、「たとえ布施はくれなくともこんな無礼なことをするとは、仏様がこわくないのか」といい、寺に帰って行った。僧は寺にもどって大師にそのことを報告した。大師はあくる日、変装をし、自分で確かめてみようとして長者の家を訪ね、仏様に布施を施すように勧めた。すると家主は、相変わらず「布施だって、よし、牛の糞を布施としてあげよう」と答えた。大師はなるほど悪心の長者だと内心想い、はじめはいろいろと甘い話をしてから、最後に「あなたが万福を保ち、長生きしたければ、屋敷の裏山の龍の背形を切りなさい。そうすればきっとあなたの子孫は繁栄し、もっと財宝を得ることができるでしょう」といって帰って行った。欲張り家主はこの話を信用した。あくる日、人夫を百人ぐらい雇い、裏山の龍の背中形の部分を切り離すために掘らせた。すると、

突然そこから真赤な血の水が湧き出たかと思うと、あっという間に鯨のような瓦葺きの家は水に埋もれ、その一帯は川になったという。この川はいつ見ても水が黄色だという。

—京畿道開豊郡—（崔仁鶴1977：361，原文は崔常壽1984：36—37）

事例1の長者池伝説の場合と大筋において共通した展開を示しているが、長者の家が水に埋もれる直接の原因となったのは、裏山の龍の背形を切ったためである。これは「風水」の思想にもとづいている。たとえば、次の例も風水の思想を端的に反映している。

〔事例7〕 今から数百年前、黄海道黄州郡仁橋面陵山里に坡平尹氏という高名な風水師がいた。ある年、彼は村の裏山にある岩の上に、帝王が生まれる相を見つけ、そこに先祖の墓を移葬して、墓の表面を帝王の墓らしく型どっておいた。それから尹氏の家は次第に繁昌していった。ある年の秋、墓参りのとき、布施にきた僧を冷遇したので僧は怒り、ある日、尹氏の墓地の前にある岩を壊してしまった。このとき不思議にも、その岩の真中に石の箱のようなものがあって、その中から一匹の金色の魚が出てきて死んだという。それから尹氏の家はだんだん衰え、今はその部落には、二、三軒しか住んでいないという。

—黄海道黄州郡—（崔仁鶴1977：345，原文は崔常壽1984：347—348）

このように、やってきた僧を冷遇するモチーフは長者池伝説と共通であるが、事例6、7では、僧が風水の心得をもっており、風水の力によって長者の家を滅ぼしたり、衰えさせたりしている。長者池伝説においては、僧のもつ仏教的な力によって長者の処罰がおこなわれていたのと比べると、説話の背景となる信仰的基盤の違いが想定される。風水の思想は韓国の民間信仰の中で大きな影響力をもっている。『朝鮮を知る事典』の「風水説」の項には次のように記述されている。

人間に及ぼす地気の作用を信じ、山脈、丘陵、水流などの地勢を観察して、さらに陰陽五行や方位をも考え合わせ、最も吉相と見られる地を選び、これに都城、住居、墳墓をつくらせる地相学、宅相学、墓相学をいう。（中略）李朝以降には主として、子孫に繁栄をもたらすことを願って先祖の墓所選定に風水が重視されるようになり、広く民間に普及した。大地の生気の衰旺・順逆はおもに山と水の形状によって左右され、吉気の盛んな地に葬れば、遺体はその生気に感應してその子孫の禍福にも反映するとされる。（伊藤1986：365）

事例6、7のような風水の思想を導入した説話が、長者池伝説の変異型としていくつも存在していることについて、崔来沃は次のように述べている。

このような仏教の力が弱まった形の変異が生じたのは、仏教が布教用に風水地理説を利用しようとして、逆に風水地理説の普及に仏教が利用されるようになり、また李朝時代の排仏政策によって仏教の力がさらに弱まり、儒教の祖先崇拜の思想により、風水によってよい墓の場所を選ぶことの比重が大きくなっていったことに原因があると思われる。（崔

來沃1981:34)

この指摘に示されているように、韓国の説話は風水地理思想と深い関連をもっている。崔來沃によれば、「韓国に広く分布している伝説の大部分は風水思想を背景としている」(崔來沃1981:107)という。たとえば、事例6や事例7のように長者の没落に関わるものだけでなく、長者になった由来も、風水思想にもとづいて語られている例が多い。

[事例8] 今から約千年前、李という心のやさしい人が川で船頭をしていた。ある日、老僧が一人来たので川を渡すと、忘れ物があるので引き返してくれという。引き返して再び川を渡ると、またもどしてくれという。このようにして何十回も川を往復したが、李は少しも怒らず、老僧の要求に従った。老僧が何かお礼がしたいというと、李は、父のよい埋葬地が見つからず、仮埋葬にしていることを告げた。すると、老僧は、李をつれて裏山に登り、明堂(風水上、地気的作用のいいところ)を教えた。李が人夫を雇い、父の遺体をそこに移葬すると、李の家はととも栄え、富貴栄光を保つようになった。(後略)

—忠清南道公州市—(崔仁鶴1977:332—333)

このように風水の思想は、家の繁栄と衰亡の両方の説明原理として、韓国では機能している。また、この風水による説明原理が、村全体に関わるものとして語られることもある。

[事例9] 慶尚北道奉化郡鳳城面遠屯里高岩洞は、とても美しい自然に恵まれた村である。昔、この村はとても豊かな村で、瓦葺きの家が多かった。ところが不思議にも、この村の人たちは僧をととも嫌った。ある日、一人の僧が旅の途中、この村に立ち寄って、ちょっとの間休んでいるのを見つけ、村の人たちは僧を縛って木に結びつけた。すると僧は「村の中央にある円い岩をこわすと、この村にはきっと宮廷が建ち、王様が生まれるはずです」といった。村の人たちは僧の話に従い、彼を放して行かせた後で、石工を呼び岩をこわしはじめた。あまりにも大きい岩だったので、こわすのに百日もかかった。間もなく百日になろうとするとき、にわかにかわられた岩から光がさした。すると石工は突然目が見えなくなり、岩からは一羽の鶴が出てきて、遠くへ飛んで行った。その後、村はしだいにさびれてゆき、ついにととも貧しい村に変わってしまった。人々は、村の隣りにある森の中に巣を作っている鶴を指し、かつて岩から出て行った鶴の子孫たちであり、忘れられないふるさとを思い出して毎年飛んでくるのだと信じている。

—慶尚北道奉化郡—(崔仁鶴1977:354)

このように韓国の来訪者をめぐる伝承においては、風水思想と結びついた変異型が見られることが、ひとつの大きな特徴といえる。では日本の場合、来訪者の歓待と冷遇の後の展開にはどのような特徴が見られるだろうか。

「宝手拭」、「猿長者」、「大歳客」の三つの話型の中で、来訪者の超越的な力が一番はっきりと示されるのが、「猿長者」である。来訪者を歓待した者を若返らせ、また冷遇した者を猿

に変えるというように、日常的な領域を超えた特別な力を示している。来訪者が端的に「神」と語られている例があることは、この話型において来訪者が人間より一段高い領域に位置づけられていることを裏付けている。

〔事例10〕 神様が大みそかに天から降りてきて金持ちに宿を頼むがことわれ、隣の貧乏人の家に泊めてもらう。神様は持っていた肉を煮させ、「若くなって子どもを生むのと、お金とどちらがよいか」と尋ねる。夫婦が「若くなりたい」というと、神様は二人に「水を見つけて汲んでこい」といいつけ、それを浴びさせると二人は若返る。金持ちがそれを聞いて神様を呼びもどし、同じように水を浴びると鼠や猿になる。貧乏人は神様にいわれて金持ちの家をもらい、毎日まわってくる猿を神様に教えられて石を焼いて追い払う。猿は焼けた石にすわったので尻が赤くなった。

—沖縄県具志川市—（『通観』26：52）

「宝手拭」の場合は、話のレベルがかなり世俗化しているが、来訪者はなお超越的な力をもった処罰者のイメージを残している。「大歳の客」の場合、来訪者の位置づけがかなり曖昧になってきている。来訪者を歓待した者が富を得る過程の語られ方は、鈴木正彦（1984〔1953〕：180）の分類によれば、次の三つである。

- (イ) 客の死骸が、銭、金、小判などに変わる。
- (ロ) 客の姿は消えて、そのあとに黄金、金箱、大判小判などが残っている。
- (ハ) 客の姿も黄金もなく、それから後しあわせになり、金持ちになる。

どの場合でも、来訪者がどのような力で富をもたらしたのか、あまりはっきりせず、来訪者を歓待した者に一種の僥倖のような感じで富が与えられる。また、来訪者を冷遇した者に対する処罰もそれほど厳しい形では語られないことが多く、あるいはまったく語られない場合もある。このような点からみると「大歳の客」においては、来訪者が冷遇した者に対して処罰をおこなう、という側面には重点がおかれず、村落共同体に住む者が外部からやってきた来訪者を歓待して富を得るといった側面が強調されている。来訪者の超越的な力という要素を抜き取って、世俗的、日常的なレベルにひきよせた語りに次のようなものがある。

〔事例11〕 貧乏な爺婆がいて、婆は足が不自由だったが二人は仲がよかった。二人が汚い六部を泊めると、翌朝起きてこない。爺が稼ぎに出たあと婆が行くと、六部の寝床は空で、財布が残っている。婆が財布を持って不自由な足で懸命に六部を追って坂まで来ると、六部は消えたので、二人は財布の金で裕福に暮らした。檐下のその坂を「追っかけ坂」という。

—山形県上山市—（『通観』6：200）

「大歳の客」の類話は、来訪者の信仰的な背景が稀薄になってきた状況を反映して、来訪者の位置づけがさまざまに揺れ動いているようである。このように日本の来訪者をめぐる三つの話型は、来訪者の位置づけ方の違いによって生じた変異型と考えることができるが、そこに韓

国の場合のような風水思想との結びつきは見られない。むしろ、事例5、6や事例11のように、来訪者自身が外部から持ち込んだ具体的な富によって個々の家の繁栄を語るという形の類話が多いことが目立っている。

本稿の考察の範囲では、これ以上、説話の背景となる民衆の思想の領域に踏み込んでいくことはできないが、韓国の伝承と日本の伝承を比較して見えてきた今後の課題として、韓国の風水をめぐる説話をさらに詳しく検討して、日本の伝承との対応関係を明らかにしていくことが考えられる。

おわりに

本稿では、韓国の「長者池伝説」とその変異型に日本の伝承を並べる形で比較をおこなってきた。韓国と日本における来訪者をめぐる説話を包括的にあつかったものでは決してなく、〈来訪者〉、〈来訪者を冷遇する者〉、〈来訪者を歓待する者〉という三者の相互関係という枠組みを設定して、限定した範囲での考察をおこなった。⁽⁴⁾比較のレベルとして、昔話と伝説という区分からいうと、韓国の引用事例は基本的に伝説に属するものであり、日本の引用事例は昔話として位置づけられているものである。しかし本稿では、具体的な事物、人物に結びつけて語られているかどうか、その内容が信じられているかどうか、という基準による昔話と伝説の区別は考えず、物語性をもった語りという次元を抽出して説話の構成の比較をおこなった。来訪者をめぐる説話の比較という点からは、日本で非常に幅広く語られている弘法大師伝説もとりあげるべきであったが、物語としての記述の整った資料を揃えられなかったため、今回は比較の材料とすることができなかつた。⁽⁵⁾弘法大師伝説の中で代表的な「弘法清水」の例の一つあげると次のようである。

〔事例12〕 下区の谷川で婆さんが洗濯をしていると弘法大師が通りかかり、谷川の水を一杯所望したのを婆さんはすげなく断ったので、それ以後谷川の水は止まった。次に中区へ来て谷の水を求めると、そこの婆さんは親切に汲んできてくれたので、中区の水はきれいで、一度もかれたことがない。

—福井県遠敷郡— (『日本伝説大系』6:324)

柳田國男は、この「弘法清水」の伝説の背景となる思想について、「日本の古風な考え方は、人間の幸不幸は神様に対するわれわれの行いの、正しいか正しくないかによって定まるように思っていました。その考え方が、今でも新しい問題について、おりおりは現れて来るのであります」(柳田1990 [1929]:189)と述べている。このような解釈は本稿の分析から見てもある意味で妥当であるが、「弘法清水」の背景にあるような思想を「日本の古風な考え方」というように限定していくことには問題がある。本稿では韓国と日本の事例をとりあげただけで

あるが、来訪者の歓待と冷遇をめぐる説話の分布はほとんど世界各地に広がっているようである。したがって、日本国内の資料をまず整理・分類することは分析のための第一段階として必要不可欠であるが、日本国内の資料の分析だけから、その背景にある意味を探っていくことには大きな制限がある。たとえば、伊藤清司は、中国の貴州省において日本の「大歳客」や「宝手拭」と基本的に同一の構成をもつ説話が伝承されていることを報告している。

〔事例13〕 黄は善良な老人であった。ある日、彼の家に見知らぬ乞食が訪ねて来て宿を請い、半年間も逗留し続けるが、黄老人もその家族も嫌がらず歓待した。やがて立ち去るとき、乞食は黄老人に魚籠を持ってついて来るようにといった。いわれたとおりにして、泉のほとりまで行くと、とたんに泉の水はかれ、黄老人はその底へ案内された。そして、いわれるままに横たわっている魚を拾い、魚籠に一杯入れて地上にもどって来ると、その乞食の姿はどこにもない。黄老人は「あの乞食は神仙の化身だったのか！」と思わずつぶやいた。家に帰って魚籠の中を見ると、魚はすべて金銀に変わっていた。

—中国貴州省—（伊藤1991：42—43）

このような類似した伝承を見ると、日本国内の資料の分析だけで資料を意味づけするのは、非常に恣意的なことに思われてくる。本稿であつかった来訪者をめぐる説話の日本の社会、文化の中における意味を探っていくためには、国外の類似した伝承に目を向けて、説話の構成要素を細かく分析していくことが必要とされるのである。そのような方向の試みの一つとして、本稿では、来訪者をむかえる人物の側の相互の対立関係を分析し、日本と韓国におけるその傾向を把握しようとした。この分析は日本と韓国の比較だけで閉じてしまうものではなく、資料のレベルが揃えば、他の文化の資料を同様の比較分析に乗せていけるように構想した。そのために、単に例が多い、少ない、ある傾向が強い、弱い、を論じるだけでなく、資料分析の結果を数量化することを試みた。分析資料の母体数は決して充分ではないが、百分率を表示したのはそのためである。

本稿の考察を通じて、〈来訪者〉、〈来訪者を歓待する者〉、〈来訪者を冷遇する者〉の三者の相互関係のあり方の比較研究をおこなうことによって、日本の来訪者をめぐる説話の特質を明らかにしていく、という見通しが示された。また、来訪者がどのような力をもつ者として位置づけられているかを考察することを手がかりに、説話の背景となっている民衆の思想の研究の領域にはいりこんでいくことが、今後の大きな課題である。

註

- (1) 以下、『日本昔話大成』を『大成』、『日本昔話通観』を『通観』と略記する。
 - (2) 『通観』では、「大みそかの客一授福型」とよばれている話型である。
 - (3) 川森(1991)において、日本の昔話全体において〈隣同士〉の対立関係が幅広くあらわれ、日本の昔話の大きな特徴となっていることを論じた。また、小澤(1984)も参照。
 - (4) 韓国における来訪者説話のさまざまな類型については、依田(1985)が論じている。また、大林(1979)は、「長者池伝説」を日本の「日招き長者」の伝説と比較して論じている。
 - (5) 朴銓烈(1989:115—126)は、「長者池伝説」と「弘法大師伝説」の比較考察をおこなっている。
- *引用事例には、筆者が要約あるいは表記の統一をおこなったものがある。

参考文献 * []内は初出年度

- 伊藤巫人 1986 「風水説」『朝鮮を知る事典』p.365, 平凡社。
- 伊藤清司 1991 「大蔵の客—その系譜—」『昔話伝説の系譜—東アジアの比較説話学—』pp. 41—77, 第一書房。
- 稲田浩二・小澤俊夫編 1977—1990 『日本昔話通観』全29巻, 同朋舎。
- 稲田浩二・小澤俊夫編 1982 『日本昔話通観』2, 同朋舎。
- 稲田浩二・小澤俊夫編 1986 『日本昔話通観』6, 同朋舎。
- 稲田浩二・小澤俊夫編 1984 『日本昔話通観』10, 同朋舎。
- 稲田浩二・小澤俊夫編 1983 『日本昔話通観』26, 同朋舎。
- 大林太良 1979 「長者の没落—日本と朝鮮の伝説の類似と相違—」『神話と民俗』pp. 127—142, 桜楓社。
- 小澤俊夫 1984 「昔話にみられる隣モチーフ—日本」, 川田順造・徳丸吉彦編『口頭伝承の比較研究』1: 226—252, 弘文堂。
- 川森博司 1991 「日本昔話における対立の構造—隣モチーフを中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』32: 1—21。
- 鈴木正彦 1984〔1953〕「歳の夜の訪客—昔話を中心として—」『日本昔話研究集成』3(昔話と民俗): 178—197, 名著出版。
- 福田晃編, 伊藤曙覧・藤島秀隆・松本孝三著 1987 『日本伝説大系』6(北陸編), みずうみ書房。
- 三原幸久 1977 「猿長者」『日本昔話事典』pp. 391—392, 弘文堂。
- 柳田國男 1990〔1929〕「日本の伝説」『柳田國男全集』25(ちくま文庫): 155—318, 筑摩書房。
- 柳田國男編, 山口麻太郎採集 1973 『長崎県壱岐島昔話集』(日本昔話記録13), 三省堂。
- 横山登美子 1984〔1958〕「死骸黄金譚の展開」『日本昔話研究集成』3(昔話と民俗): 167—177, 名著出版。
- 吉野裕訳 1969 『風土記』(東洋文庫145), 平凡社。
- 依田千百子 1985 「朝鮮のまれびとと説話—日本と朝鮮の「神聖な訪問者」問題に寄せて—」『朝鮮民俗文化の研究』pp. 77—94, 瑠璃書房。
- 朴銓烈 1989 「門付けを受け入れる社会」『門付け』の構造—韓日比較民俗学の視点から—』pp. 105—149, 弘文堂。
- 崔仁鶴 1977 『朝鮮伝説集』, 日本放送出版協会。
(韓国語文献)
- 崔來沃 1981 『韓國口碑傳説의 研究』, 一潮閣。
- 崔常壽 1984〔1946〕 『韓國民間傳説集』, 通文館。
- 韓國精神文化研究院語文研究室編 1980—1988 『韓國口碑文學大系』全82巻, 韓國精神文化研究院。
- 韓國精神文化研究院語文研究室編 1986 『韓國口碑文學大系』2—8(江原道寧越郡篇①), 韓國精神文化研究院。

(国立歴史民俗博物館 民俗研究部)

Folktales Dealing with Visitors

—From the Comparative Viewpoint of Japan and Korea—

KAWAMORI Hiroshi

Stories in which the host brings happiness or unhappiness on himself by treating a guest warmly or coldly are widely told all over the world. This paper aims to examine comparatively some examples from Japan and Korea. The "Millionaire's Pond Legend" is widely told from generation to generation in Korea. The gist of the story is that the house of a millionaire, who treated a visiting priest badly, sank and turned into a pond. In Japan, there are many old tales of the type called the "Visitor on New Year's Eve". The principal characters of this type of story are "the visitor", "the person who welcomes the visitor", and "the person who treats the visitor coldly". In this paper, first of all, the human relationship between the person who welcomes the visitor and the person who treats the visitor coldly is examined. In the "Millionaire's Pond Legend", the confrontational relationship between <father-in-law and daughter-in-law> is remarkable. In the "Visitor on New Year's Eve" tales of Japan, the confrontational relationship between neighbors is remarkable. It is considered that these reflect the concern of people in each culture regarding the human relationship. Then, if we examine the different kinds of visitor in Korea, the visitor is mostly a Buddhist priest, but often with the image of a Taoist overlapped onto the character. In Japan, a travelling religionist or blind religionist often appears in these tales. This reflects the difference in religious background and transmitters of the stories of each country. Thirdly, when we examine the variations that happen after the visitor is treated badly in the "Millionaire's Pond Legend", we find that the visitor often destroys the millionaire using his knowledge of "geomancy". This type of visitor-related story connected with the concept of geomancy is not seen in Japan. This constitutes an important characteristic of Korean stories. In the field of folktales where there exist many internationally-common types, it is necessary to examine the points of similarity and difference, by comparing Japanese folktales with similar foreign folktales, to give meaning to the Japanese folktales.